北の不思議な話

小川未明

青空文庫

おせんといって、村に、唄の上手なけなげな女がありました。たいして美しいというのではなかったけれど、黒い目と、長いたくさんな髪を持った、快活な女でありました。機屋へいって働いても、唄がうまいので、仲間からかわいがられていました。

これらの娘たちは、年ごろになると、たいていは近傍の村へ、もしくは、同じ村の中で嫁入りをしましたのに、どうした回り合わせであるか、おせんは、遠いところへゆくようになったのです。

村で、おせんの望み手がないのでなかった。そればかりでなく、みんなは、その結婚をいいと思わなかった。しかも、彼女は孤児であって、叔母さんに育てられたのであるが、叔母さんも、この結婚には不賛成でした。なぜなら、相手というのは、遠い旅から行商にきた、貧しげな青年だったからです。

この青年は、村へやってきて、娘たちに、貝がら細工や、かんざしや、香油のようなものを並べて商ったのです。そして、ときに、彼は山のあちらの国々の珍しい話などを聞かせたりしました。おせんは、あるとき、彼が、子供の時分に両親に別れて、その父母の行方がわからないので、こうして、旅から旅へさすらって探しているという話を聞いたときに、同じ孤児の身の上から、彼に同情するようになったのでした。

「私たちは、山のあちらの明るい国へいって、働いて暮らしましょう。」と、二人は誓い合っ

た。

叔母さんも、ついに二人の願いを許さなければならなかった。そして、二人が、家を出るときに、

「いつまでも、達者で、仲よく暮らすがいい。」といって、見送ったのでした。

いつのまにか、月日はたってしまった。そして、彼女のことは、おりおり、村人の口の端に上るくらいのもので、だんだんと忘れられていった。村の機屋では、あいかわらず、若い女の機を織る音が聞かれ、唄の声が、家の外へひびいていたのです。

ある年の秋も、やがて、逝こうとしていました。沖の雲切れのした空を見ると、地平線は、ものすごく暗かったのです。そして、里の子供たちは、丘へ上がって、色づいたかきの葉などを拾っていました。

この日、ふいに、おせんが、村へ帰ってきました。彼女の姿は、昔とは変わっていたけれど、そのもののいいぶりや、黒い、うるおいのある目つきには、変わりがなかった。

「どうして、帰ってきた?」と、彼女を知っている人たちは、たずねました。

「わたしには、もう二人の子供があります。夫が長い間、病気で臥していますので、知った人に買っていただこうと思って、商いにまいりました。どうか、わたしの持ってきた品物を買ってください。わたしは、船に乗って、荒海を渡ってやってきました。」といいました。

村の人たちは、顔を見合わせた。

「このごろ、沖の方は、暴れているだろうに……。」

「まあ、どんなものを持ってきたか……。」

おせんは、持ってきた品物を、みんなの前に拡げて見せました。いつか、青年が、行商にきた時分に持ってきたような、青い貝細工や、銀のかんざしや、口紅や、香油や、そのほか女たちの好きそうな紅い絹地や、淡紅色の布などであったのです。

「娘たちが見たら、さぞ喜ぶことだろう。男には用のないものだ。」

「ああ、男には、用のないもんだ。帰って、女たちに話して聞かせるべい。」

男どもは、体よくその場を引き揚げました。しかし、女たちも、おせんが帰ったと知って、品物を見にやってきたものは、まれだったのであります。

おせんは、あちらから流れてくる、機屋でうたっている唄を聞いて、自分の昔を思い出して、涙ぐんでいました。

「おせんや、雪の降らないうちに、帰ったらいいだろう……。」と、叔母さんは、いいました。

もう、このごろは、毎日のように天気は暴れていました。おせんは、せっかく持ってきた品物をしょって、二度とこの村へはくることもなかろうと思いながら、暇ごいに歩いたのでした。

海の上は、もはやゆくことができなかった。彼女は、あちらの山を越えてゆかなければならなかった。村の人々の中でも、おせんをかわいそうに思ったものもあります。

「こんなお天気に、女の身であの山が越えられるだろうか？」

彼女が旅立ちをしてから、叔母さんは毎晩のように、門口に立って、あちらの山の方を見て案じていました。雨が降ったり、みぞれになったり、風が吹いたりして、満足の日がなかったのでした。

ちょうど、おせんが、あの山にかかる時分でありました。西の空が、よく晴れて、雲の色が、それは美しかった。さながらおせんが持ってきた、貝細工のように、銀のかんざしのように、紅い絹を拡げたように、淡紅色の布地を見るように、それらのものをみんな大空に向かって投げ撒いたように……。

叔母さんは、この景色を見て、

おせん、
おせん、
西の空に、
紅さした……。

といって、喜びました。

これから、この文句は、長く北国に残って、子供たちが、いまでも夕焼け空を見ると、その唄をうたうのであります。

――一九二七・一作――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　6」講談社
　　1977（昭和52）年4月10日第1刷
底本の親本：「未明童話集3」丸善
　　1928（昭和3）年7月6日
※表題は底本では、「北《きた》の不思議《ふしぎ》な話《はなし》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：栗田美恵子
2020年4月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の不思議な話

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/